



## 中西夏之の絵画思想：「絵画場」の形成にいたる経緯についての考察

著者	小田原 のどか
内容記述	この博士論文は内容の要約のみの公開（または一部非公開）になっています
発行年	2015
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2014
報告番号	12102甲第7411号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00134432">http://hdl.handle.net/2241/00134432</a>

[博士論文概要]

## 中西夏之の絵画思想 －「絵画場」の形成にいたる経緯についての考察－

平成26年度

小田原のどか

筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻

本研究では、画家・中西夏之(1935-)の絵画について、中西がかたちづくる「絵画場」の思想の展開の端緒を探ることを通して、中西の絵画の独自性を明らかにするための考察を行う。中西の「絵画場」とは、1995年(平成7年)に開催された神奈川県立美術館での中西夏之個展《着陸と着水 舞踏空間から絵画場へ》のタイトルと、同展のための中西の文章『少鉄球及び絵画場』においてはじめて公に用いられた中西による造語である。1980年(昭和55年)の絵画制作方法の変化から、中西の絵画は転換を迎え、さらに1995年(平成7年)に《着陸と着水 舞踏空間から絵画場へ》では舞台装置をそのまま移管したかのような大規模なインスタレーションが繰り上げられた。作家としての活動の最初期から絵画を連作の形で発表してきた中西は、連作という形式を用いて、一枚の絵では完結することのできないものを捉えようとしていたといえるが、《着陸と着水 舞踏空間から絵画場へ》で中西は絵画が発生する場所そのものをインスタレーション作品によって捉えようと試みている。本論では、本展に画家・中西夏之の絵画思想が結実していると仮定し、本展が開催された1995年(平成7年)までの中西の画歴と、その背景にある思想について、いくつかの仮説を示しながら論述する。本論は5つの章からなり、中西の履歴のなかでも画業の最初期の30年にとくに焦点を当て、中西が絵画を中断しそして再開した経緯と絵画の制作方法の確立を跡づけることで、中西の絵画論・絵画場の思想が成立した経緯を考察する。

前述したように、中西の画業にはいくつかの転換期が存在している。本論でとりあげる転換期とは、具体的には、反絵画的パフォーマンス活動に集中し絵画の制作から距離を置いていた1962年(昭和37年)から1964年(昭和39年)までの期間と、この時期に重なるようにしてスタートした舞踏家・土方巽(1928-1986)との協働と絵画発表を再開した1967年前後、そして制作方法が刷新された1980年(昭和55年)前後であり、これらを「絵画の中断」「再開」「制作方法の

転換」の3つの転換点と定める。1章では、3つの転換期の考察の導入として、中西の歩みを概観し、論点の整理を行う。ここでは中西の関係者への取材から明らかとなった知見も考察し、中西の展覧会歴を追いながら、絵画への取り組みをあとづけていく内容である。1958年(昭和33年)に東京藝術大学油絵科を卒業した中西は翌年に『韻』でシェル賞を受賞して作家としての活動をスタートさせる。そして1962年にプレハイレッド・センターとしていくつかの企画を催し、絵画の制作から一度離れることになった。2章においては、この絵画の発表を間断していた期間の中西の伝記的史実を跡づけながら、ハイレッド・センターとして活動を行っていた時期の思索と作品を調査した。3章では、中西が絵画の発表を中断し土方巽の舞台へ協力していた期間について取り上げ、土方との協働を経て絵画を再開した経緯を追うことで、絵画場の思想の展開の端緒について考察した。中西が土方の舞台へ協力していた時期にもっていた構想は「空間メモ」として記録されており、論者はこのメモの調査を実施し、協働の具体的な内容に迫った。土方との協働を経て中西は絵画の制作に集中することになった。これまでに発表された中西の絵画群を眺めると、1980年(昭和55年)前後を堺に画風が変化していることがみとめられる。これは彼の絵画制作方法の刷新から生じたものである。では、この制作方法の転換はどのようにして起こり得たのか。4章ではこの転換期を記録した映像資料とその映像資料を補足する資料、そして実作の観察と撮影を行った。絵画の中断と再開を経てむかえた、中西絵画の転換点といわれる時期に制作された油彩画『作品・5月Ⅰ』の筆触の観察と、その転換点を捉えた映像であり、制作中の中西に迫った現在までの唯一の映像資料である日本放映制作のテレビ番組《“美の世界” 中西夏之-人は最初どのように絵を描くか-》(1981年放映)と、中西が《美の世界》のために制作した《テレビジョンのためのノート-人は最初どのように絵をかくだろうか、最初の人はどうに絵をかいたのだろうか-》の調査の結果から、中西が現在の絵画制作のスタイルがどのように確立されたのかを、記録映像や制作メモといった実際の資料の調査をもとに、1981年までの活動に言及しながら考察する。5章では、3章までのそれぞれの期間に培われた中西の絵画観が、中西の文章『少鉄球及び絵画場』にどのように結実しているのかについて、文献調査を中心とし中西の主要な発言を時系列にそって考察する。中西が目指す絵画と絵画観賞について、「絵画場の思想」とはどのようなものかという視点を主軸に論じていく内容である。